

松山アーバンデザインセンター
Urban Design Center Matsuyama

ANNUAL REPORT
2014.04-2015.03



目次

1.	はじめに	2
2.	アーバンデザインセンターの設立に寄せて	3
3.	一年を振り返る	4
4.	松山アーバンデザインセンターの概要	7
	4-1. コンセプト	
	4-2. 体制（メンバー）	
	4-3. 評価体制	
5.	実践活動	
	5-1. みんなの広場とアーバンデザインセンター	9
	5-2. 道後温泉活性化基本計画策定	13
	5-3. その他の実践的取組み	16
6.	教育活動	
	6-1. アーバンデザインスクールの開講	17
	6-2. 風景づくり夏の学校の取組み	19
7.	研究活動	
	7-1. 第一回アーバンデザイン研究会	21
	7-2. 第二回アーバンデザイン研究会	23
8.	活動記録	
	8-1. 活動フィールド	25
	8-2. スケジュール一覧	26
	8-3. 発表論文等リスト	
9.	おわりに	27

次代のまちづくりへ

アーバンデザインセンター設立によせて

松山市長 野志 克仁

松山市は松山城や道後温泉をはじめとする歴史的建造物、俳句やお遍路などの文化、温暖な気候と豊かな自然が育んだ海や山の幸があり、温かいおもてなしの心が息づくまちです。

先人が残してくれたこの素晴らしいまちを、50年後、100年後と引き継いでいくために、私たちは一致団結して、少子高齢化、人口減少社会をはじめとする様々な課題に取り組んでいかなければなりません。

私は、就任以来、市民の皆さんが主役になってはじめて、活力ある持続的なまちづくりが達成できると考えており、そのためには市民目線と現地・現場を大切にすることが重要だと常々考えていました。

こうした中、民間、大学、行政が連携して、平成26年2月に松山市都市再生協議会とその執行機関である松山アーバンデザインセンター（UDCM）が設立され、平成26年11月には中心市街地の商店街周辺にUDCMの拠点施設が開設されました。

拠点施設では、常時、まちづくりの専門家である大学の先生方に駐在して頂いており、市民の皆様のまちづくりの相談やアイデアを、いつでも気軽に話し合うことができるようになりました。そして、現在UDCM主催のアーバンデザインスクールが開講され、松山市内の4大学の先生方の連携のもと、次代の担い手を育成する取組もスタートしています。

また、UDCMの拠点施設の前に、芝生が広がる「みんなのひろば」がオープンし、まちの憩いやにぎわいを生み出すための社会実験が行われています。

「みんなのひろば」は、オープン前から、まちづくりに関心のある市民の方々がUDCMにもアドバイスを頂きながら、ワークショップで検討を重ね、そのアイデアを形にした「ひろば」です。今後も現地・現場で市民の皆さんと意見交換しながら改良を重ね、老若男女に親しまれる快適な「ひろば」にしたいと考えています。

さらに、昨年の夏には、UDCMが中心となり、「風景づくり夏の学校2014」が開催されました。道後地区を対象として、全国の学生や若手実務家の方に、まちづくりの設計競技を行って頂き、ユニークな御提案を数多く頂きました。現在、UDCMと連携して道後温泉活性化計画の策定に取り組んでおり、頂いた提案は大いに参考になると考えています。

他にもUDCMには、一番町大街道口の景観整備や花園町通り空間改変といった本市の重要施策に参画頂いており、民間、大学、行政が連携したまちづくりがより加速するものと確信しています。

今後、市民の皆様が松山市に愛着と誇りを持ち、笑顔があふれ、幸せを実感できる都市になるよう私も精一杯努力していきます。関係者の皆様にはより一層の御協力をお願いするとともに、UDCMが次代のまちづくりの核として、ますます発展されることを期待しています。



野志克仁 松山市長

2. アーバンデザインセンターの設立に寄せて

愛媛大学防災情報研究センター長 矢田部 龍一

1. 宇宙も人間も調和体

宇宙も、自然も、人間も調和体である。また、個別に存在目的があるので機能的でもある。そのため、人間は、調和的、機能的なものに美を感じる。調和的な美や機能的な美は絵画や音楽などのすべての芸術作品に見られる。また、自然の造形である植物や動物もすべて調和的で機能的である。キリンの首やゾウの鼻がどんなに長くても、全体的に見れば調和している。人間の首だけがキリンのように長く、また、鼻だけがゾウのように長ければ何となく違和感があるかもしれない。自然の産物は実に調和的に、機能的に作られている。

日本人はもともと美意識の優れた民族である。はっきりとした四季の移り変わり、複雑な地形と地質、それに育まれた多様な豊かな生態系、・・・、自然が作り出した見事なまでの美の中で日本人の心は耕されてきた。その結果、一杯のお茶に宇宙を感じ、一輪の花に宇宙を表現し、17文字の言葉で自然の美しさ、命のほかなさ、人間の優しさや悲しさなどを表現できる。世界に類を見ない民族と言える。

そのような人たちが作った街並みも美に満ちていた。太平洋戦争の爆撃に遭わず、戦後の経済発展からも取り残された街並みに日本人の美意識を見て取ることができる。萩、津和野、内子、飛騨高山、・・・いずれの町も廃藩置県の前には豊かな文化が花開き、経済も潤っていた町である。たまたま、今日の経済優先社会の仕組みから、はじき出され、投資効果がないために古い街並みが残されてきた。そのような町が、観光地として脚光を浴び、多くの人が訪れている。先人の美意識と腕の良い職人達が残した遺産が、今、花開いている。戦後、世界的な建築家が何人も誕生した。しかし、彼らの誰一人として、名もなき職人達が作った調和に溢れた街並みを超えることができていないように思える。

2. 戦後の日本の街並みは

敗戦の焦土から立ち上がった日本は、東洋の奇跡と呼ばれる経済発展を遂げ、経済的には豊かな生活を手に入れた。しかし、その経済発展と引き換えに失われたものも多い。美しい街並みも失われたもののひとつである。日本各地の都市の景観は決して褒められたものではない。

戦後、日本人が作り上げた街並みは、経済至上主義や個人主義優先の中で、個々人が調和よりもエゴをむき出しにして作り出した街とも言える。そのため、調和がなく、街並み全体を眺めた時にあまり美的なものを感じない。それどころか、劣悪な街並みを眺めていると人間のエゴが前面に出ており、気分が悪くなるようにさえ感じさせられる。

3. 松山アーバンデザインセンターの設立と活動

地域には地域の自然があり、文化がある、歴史がある。幕藩体制の時代には、地域が地域として、それぞれに輝いていた。しかし、明治維新により廃藩置県が実施され、東京一極集中が始まると地域特有の文化も街並みも、急速な勢いで失われ、全国に同じ顔をした街並みが形作られるようになった。

松山には松山らしい顔があるはずである。50万都市の真ん中に城山があり、美しい連立式平山城が松山の町を見下ろしている。また、歩いて行ける距離に明治のたたずまいを色濃く残す道後温泉がある。このような特有の歴史と文化遺産が息づく松山のまちづくりを推進するために、松山市都市再生協議会から愛媛大学への寄付講座として「松山アーバンデザインセンター」が設立された。センターでは、以下のような取組みを行っている。

- ・官民学が連携したまちづくりの推進
- ・まちづくり専門家のネットワークの構築
- ・まちづくり推進に向けた調整と協議
- ・持続性ある街づくりに向けたエリアマネジメントの実施
- ・まちづくりスクールを通じた専門的人材の育成

3. 一年を振り返る

松山におけるアーバンデザインの本格的始動

羽藤 英二（センター長）・新階 寛恭（副センター長）

1. はじめに

思えば、慌しく駆け抜けた1年であった。

この1年を振り返る前に、この機会にまずもその松山アーバンデザインセンターなるものの立ち上げ経緯も振り返っておきたい。

松山市においても近年特に、いわゆる中心市街地の空洞化、すなわち都心部における商業機能の低下や賑わいの衰退といった、都市の持続性そのものが危ぶまれるような事態が顕著になっているところであった。そのような状況に対する危機感から、「都市のデザイン」や「ものづくり」といった実践的なまちづくりを切り口に、閉塞する現状を関係者一体となって打破するための強い推進力となる、核となる組織、“アーバンデザインセンター”を設立しようという構想が松山で立ち上がったのが平成25年春であった。

それから直ちに組織作りに着手したのが始まりだった。

まず、松山のまちづくりにとって有力かつ影響の大きい機関である、行政、民間企業や商工団体、大学の3者を含む市内の主要な機関で構成される松山市都市再生協議会という、公民学連携のプラットフォームとなる組織の組成に向けた根回しを開始した。次に、これらの構成員をはじめとする関係者が“アーバンデザインセンター”なるものに対するイメージを明確に持ち、その理念を共有しよう、我が国のアーバンデザイン研究に関する先駆者の一人である東京大学西村教授をはじめ、多くの有識者による講演会を市の協力を得て次々と展開した。一方、街なかで既に個性的なまちづくりの取り組みを行っている地元の若手なども交え、討論会も積極的に行った。

このような下地づくりを経て、平成26年2月、松山市都市再生協議会が設置されたのである。

次に、この協議会のもと、“アーバンデザイン”を実行し、理念を「形」にしていく組織が必要となった。

このメンバー構成においても、松山の実情を踏まえて全国の他のアーバンデザインセンターでは見られない工夫を行った。松山におけるこの取り組みは、人口規模が30万から50万という中規模都市にあつて、かつ課題が深刻かつ複雑に絡み合う既成市街地中心部に真正面から取り組むという、全国の他都市にもモデルとなりうるもので、郊外新市街地などで設立された他のアーバンデザインセンターとは一線を画していたからである。

まず、松山市において「坂の上の雲のまちづくり」など希少かつ個性的なまちづくりの最先端を指揮していた市役所元幹部の松本啓治氏をシニアディレクターとしてメンバーに加えた。次に、市の持つ構想やビジョンの再検証・再構築や、既成市街地の再開発などの実践的なまちづくりにノウハウのある国の実務者を副センター長として招聘した。またアーバンデザインにおいては、歴史・文化との関係も重要であるとの観点から、全国の歴史まちづくりに精通している第一線の若手研究者の片岡由香氏をディレクターとして加えた。これらの常駐メンバーを中心に、さらに愛媛大学から、社会心理学や都市交通、工芸デザインなど多様な分野で活躍している学識経験者の方々をプロジェクトアドバイザー等に迎え入れ、「松山アーバンデザインセンター」を組成した。

さて、この1年の振り返りを行ってみたい。

松山を持続的発展が可能な都市に再生するために進むべき道のは困難で長く、またやるべきことは山積している。そこで、限られたマンパワーで最大限の効果をもたらすために、まず松山市都市再生協議会の事務局でもある市役所都市デザイン部局との間で、初年度のこの一年間に行うプロジェクトの選別・調整が必要であった。

アーバンデザインをリードする組織の果たすべき機能・役割としては、実践機能すなわち①実証実験・事業創出（デザインマネジメント）機能、次に教育機能すなわち②人材育成・情報発信機能、そしてリサーチ機能すなわち③研究・提案機能などが考えられるが、このような考えを踏まえて市役所との調整の中で整理されていったプロジェクトが次の3本を柱とするものであった。

一つ目が、都市ビジョンの再構築および各種調査・研究（研究・提案関連）、次に、実践的なデザインマネジメント（実証実験・事業創出関係）、三つ目が、アーバンデザインスクールをはじめとするソフトの取り組み（人材育成・情報発信関係）である。

2. 三本の柱

一つ目の都市ビジョンの再構築にあたっては、目指すべきまちづくりの方向性が明確であるとともに、イメージとして掴みやすく、市民にとっても分かりやすく共有しやすいものとする必要がある。一方、これまで市で策定されてきた様々なビジョンやマスタープラン、地区別の計画等ほどちらかといえば目的別の色彩が強く、全体としてイメージが掴みにくいという難点があった。そのため、まず市の既存計画等を俯瞰し、比較・検証する作業から開始した。作業にあたっては、市の複数の課の若手職員との共同作業から始め、属する組織の所掌を超えた自由な発言・提案を求めた。これにより横断的な課題が整理できたとともに、新たな発想でのアイデアも得られた。

次に、目指すべき都市のイメージやスケール感を明確にするため、国内外において先進的な取り組みを行っている都市の“つくり”、すなわち都市構造の比較調査を行った。国内では観光都市としても知られる金沢や横浜、海外ではドイツのデュッセルドルフやオランダのアムステルダムなどで現地踏査を行った。特にいずれの都市にも共通のキーワードは“自転車”であり、我が国の中でも自転車利用の盛んな松山にとって参考となるものであった。

またこのような現地調査・比較検討と並行して、松山の都市構造に対する客観的な評価も把握することとした。今年度国・市が共同で行った、「暮らしやすさ」すなわち商業施設や公益施設・公共交通等の生活利便施設への近接性に対する市民の評価をアン

ケートにより収集分析する「都市構造評価に関する市民満足度調査」の設計への協力を通じて、松山の都市としての可能性、ポテンシャルを測ることとした。

その上で、これらの成果を活かしつつ、進むべき方向性を関係者と共に見出すため、松山市都市再生協議会の構成員でもある市内の主要機関をコアメンバーとする自主研究会を立ち上げた。

また、研究・提案機能のさらなる向上、知のネットワークづくりやまちづくりを担う人材のスキルアップの観点から、様々な分野の有識者を順次招聘して一般参加のもと議論を行っていく「アーバンデザイン研究会」も立ち上げた。

このように、初年度としてはかなり充実して多角的な観点からリサーチ機能を発揮するための各種ツールを整えることができた。

次に、二つ目の実践的なデザインマネジメントであるが、松山のいわゆる街なかには、深刻な課題を抱え、早急に対応が必要となっている対象地区が複数存在している。

まずは道後温泉地区。人口50万を超え大都市に分類されるような都市の中心部近くにありながら、太古からの歴史を有し、道後温泉本館を筆頭に今なお明治の雰囲気醸し出す、世界に誇れる歴史文化地区である。しかしその本館も老朽化し、抜本的な修復が必要となっていて、松山、さらには愛媛の観光産業の命運を左右するほどの危機的状況に直面している。今年度は、この地区の再生に向けた基本計画策定の年度に当たったことから、松本シニアディレクターが中心になって、市と連携して必要な調査検討を行った。また、基本計画策定調査の一環として、多くの斬新な提案を取り入れる観点から、全国の若手を対象とした設計提案競技を行った。その結果、多くの優れた提案のほか、優秀作品提案者による継続的な計画づくりへの参加という、大きな成果も得たところである。特に、審査員として日本を代表する建築家の内藤廣氏や青木淳氏、後藤春彦氏にも来て頂いたことで、充実したプログラムとなった。

次に一番町大街道口周辺。かつて近世の町割においても人の往来の拠点であり、明治以降も盛り場として栄えるなど、今も松山の象徴であり賑わいの玄関口とも言える場所である。ここに隣接

して持ち上がった再開発計画等を契機に、交差点周辺の景観整備について関係者で検討する場が設けられたため、デザインの質の向上のためアドバイスを行った。この成果を得て、今年度中に早くもアーケード等の改修が始まったところである。

また、いわゆるL字地区という、中心市街地のさらに中心部。松山は戦災都市であり、戦後積極的に復興事業が行われたが、市街地を再整備する過程で残念ながらこの中心部において十分な緑地・広場を確保することが出来なかった。高度経済成長・バブルの時代も過去のものとなり、今や都市空間の質が求められる時代になって、あらためて街なかでの緑の空間が強く要請されるようになった。そのような経緯を経て市が今年度、都市中心部での政策上戦略的に重要な位置に広場を設置することになったため、空間レイアウトや設備等に対するデザインアドバイスをを行った。秋のオープン以降、日々多くの方に利用されており、狙いが正しかったことが証明された。

この広場に面して、市の全面的協力を得てUDCMの拠点施設を開設したのも効果的であった。広場という「賑わい」の駆動力となる装置と相乗効果を発揮して、多目的に利用できる屋内空間も十分活かしている。DIYをはじめとする様々なワークショップやイベント、大学ゼミ等が次々と展開された。開設以来その認知度が高まるにつれ次第に利用頻度も増し、利用者層の多様さも広がりを見せている状況にある。

特にオープン時には、UDCMの目指すべき方向性を世に問うフォーラムを開催した。わが国を代表する著名な建築家である青木淳氏を迎え、極めて質の高いプレゼンおよび活発な議論が行われたことは、その後のUDCMの活動を導く貴重な機会となった。

また、この広場とUDCM施設を含む「L字地区」では、かなりの広い範囲を対象に再開発事業の構想が地元により検討されている。その検討に参加し、構想づくりや進め方に関するアドバイスも行った。そのような経緯の結果、自主研究会から協議会組織へ移行すべく、地元組織が明確になってきたところである。

その他には、伊予鉄松山市駅周辺や、JR松山駅周辺も対象フィールドとして考えられるところである。

このうち花園町通りについては、地元で景観整備の検討の動き

が出てきたため、デザインアドバイスを開始したところである。

三つ目のソフトの取り組みとしては、まず特筆すべきは、羽鳥剛史副センター長と片岡ディレクターを中心に、市内の4大学が連携してまちづくりの人材育成と地元のファンづくりを目的として立ち上げた、アーバンデザインスクールが刈原調に軌道に乗っていることである。多くの若い人材が育っていくことを予感させてくれる。

このほか、ホームページも立ち上げ、新聞・テレビ・ラジオ等への露出も積極的に展開してきた。特に、FMラジオ局と連携して新たな番組企画づくりも進めているところである。様々なチャンネルを駆使してUDCMをアピールし、コミュニティづくりとあわせてデザインを進めていくことが重要である。

3. 次の展開に向けて

今年度は多岐にわたるプロジェクトを一斉に展開したが、いずれも一筋縄でいくものではなかった。しかし、プロジェクト遂行には多くの困難を伴ったものの、初年度の立ち上がりとしては、まずまずの成果を挙げつつあると思われる。次年度は、プロジェクトの質、量ともに充実させていくことが必要である。

次年度、新たに取り組むべきものとしては、中心部と道後とを結びつけるソフト施策や、歴史資源再生に向けた取り組みなどが松山らしい取り組みと思われる。

また、進め方に関する次の課題としては、このUDCMの組織の拡充、特に公民学がフラットに支える組織づくりなど、柔らかく、かつきめ細かな対応が必要である。組織もプロジェクトも、公民学連携の精神が必要といえる。

この「アーバンデザインセンター」という壮大な実験が、やがて市民にも広く認知され、大きなうねりとなって松山全体を変えて力になっていくことを願ってやまない。

4. 松山アーバンデザインセンターの概要

片岡 由香（ディレクター）

1. はじめに

近年、まちづくりにおける課題が多様化、複雑化し、より様々な関係主体による協力によって取り組むことが求められている。公共空間の質の向上に関わるテーマにおいても同様で、行政や民間団体、市民が連携して各地で進められるようになった。しかしながら、公共空間についての議論は、実際には立場や個人の主観による考え方の違いもあり、意思決定が非常に難しい。そこで、各フィールドの将来像を見据え、より良い空間を目指していくために、専門的知識を活かしながら関係主体間の調整を図る機関として、「アーバンデザインセンター」の役割が期待されている。

2. 松山アーバンデザインセンターの概要

(1) 活動拠点の開設

松山市（人口約52万人）では、人口減少・超高齢化、モータリゼーション等に伴う中心市街地の空洞化や賑わいの衰退、歴史や文化を活かした持続可能都市を目指すべく、平成26年2月18日に「松山アーバンデザインセンター」（以下、UDCM）を発足し、その活動拠点を、同年11月1日に開設した。

UDCMの活動拠点は、市の中心部（松山市湊町）に位置し、商店街に近接する区画道路に面した民間の商業ビルの1階および2階を来街者や市民の交流の場（多目的スペース）として改装した。1階の多目的スペース（面積50㎡）については、来街者の休憩、まちづくりに関わる会議やワークショップ、展示などのイベント、講座や交流会など多様な使い方が可能となっている。また、UDCMの対面には、民間所有地を改修して芝生のポケットパーク「みんなのひろば」を設置した。UDCMの多目的スペースおよびみんなのひろばについては、平日は朝10時～夜20時まで、土日祝日は朝10時～夜18時まで開館しており、時間や曜日によって様々な世代の利用が確認され、多様な活動に対応した拠点となりつつある。

これらのポケットパークや活動拠点については、平成25年より、

「松山都市デザインWS」や「みんなのひろばWS」と題したワークショップを開催し、市民の意見を反映させながら具体化を進め、「松山市中心市街地賑わい再生社会実験」として整備されたものである。



写真1. 芝生のポケットパーク「みんなのひろば」

(2) 初年度の活動

初年度の活動としては、先述の活動拠点施設およびポケットパークの開設以外に、松山市内の空間計画や景観整備などのデザインマネジメントについて、市との協働により遂行している。

具体的には、「一番町大街道口景観整備」「道後温泉活性化基本計画案作成」「花園町通り景観整備」があり、市と各フィールドに関係する民間団体、コンサルタントなどの間に入り、景観および空間計画の支援を行った。

また、まちづくりの担い手育成と、地域の方と大学、市民の交流を目的とした「アーバンデザインスクール」というプログラムについて、平成26年11月より、松山市内の4つの大学（愛媛大学・松山大学・聖カタリナ大学・松山東雲女子大学）との協働により、隔週で実施している。本プログラムについては、松山市内に在住する学生だけでなく、一般市民の参加もあり、松山市内のまちづくりの課題や、街の楽しみ方について各自が発見をし、それらから各自でテーマを導き、UDCMや地元関係者、行政と協働しながら活動を展開していくことを目指す取組みである。

表1. 活動分類

分類	活動テーマ
空間計画	中心市街地賑わい再生社会実験
デザインマネジメント	一番町大街道口景観整備
デザインマネジメント	道後温泉活性化基本計画策定業務
デザインマネジメント	再開発構想策定支援
デザインマネジメント	花園町通り景観整備
情報発信	地元メディアを活用した情報発信
人材育成	アーバンデザインスクール
学びの場づくり	アーバンデザイン研究会

(3) 活動のコンセプト

今年度の活動である「空間計画」「デザインマネジメント」「情報発信」「人材育成」「学びの場」を振り返ってみると、1) 公民学の連携、公と民の間に入って事業を進めこと、2) まちづくりの学びの場を設け、街に対して関心を持ってもらい、3) 多様な人達による関わりをつくり、それによって課題の解き方を見つけること、といった活動のコンセプトが見えてくる。

UDCMが拠点を構えて数ヶ月であるが、このようなコンセプトを持ち、公民学の連携(図.1)を推進し、今後も各事業に取り組んでいくことが、複雑化・多様化した課題を解決するために必要となるだろう。

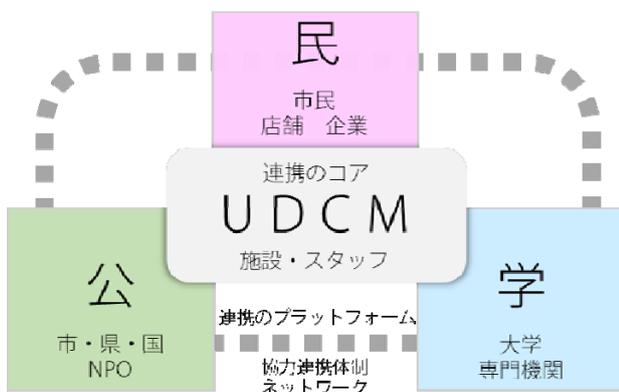


図1. UDCMと公民学の連携

3. 組織体制および評価体制

松山市は、平成26年2月に、行政、大学、民間団体が連携した組織として「松山市都市再生協議会」(以降、協議会)を立ち上げた。メンバーには、松山市内の4大学、民間企業、松山商工会議所、松山市が委員参画している。UDCMは、その協議会の執行機関

として位置づけられており、UDCMに係る運営や活動内容については、協議会において報告及び承認されている。

このような体制が整えられると同時に、同協議会メンバーである愛媛大学では、防災情報研究センター内に、UDCMの運営を遂行するための寄付講座を設置し、学内に「アーバンデザイン研究部門」が新設(図2)され、同部門の担当教員3名が松山アーバンデザインセンターのコアメンバーとしてプロジェクトの実務及び研究を進めている。

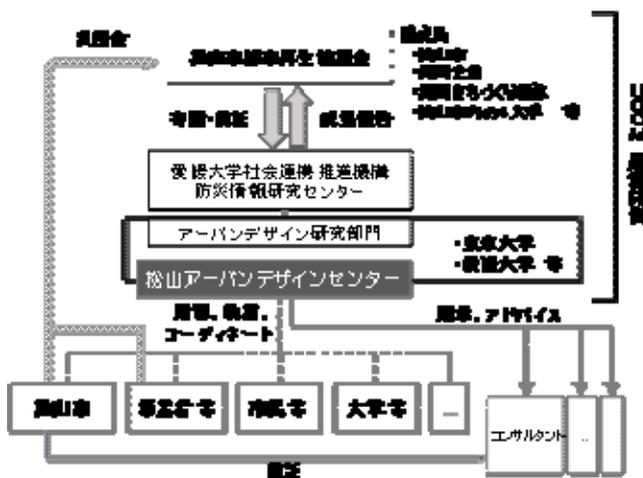


図2. UDCMと関係組織との関係図

また、UDCMのメンバーは、上記コアメンバー以外に、プロジェクトアドバイザーや客員研究員などで構成されている。

表2. UDCMメンバー(平成26年度)

UDCMでの役職	所属	氏名
センター長	東京大学 教授	羽藤英二
副センター長	愛媛大学 教授	新階寛恭
副センター長	愛媛大学 准教授	羽鳥剛史
プロジェクトアドバイザー	愛媛大学 教授	吉井稔雄
プロジェクトアドバイザー	愛媛大学 教授	松村暢彦
プロジェクトアドバイザー	愛媛大学 教授	千代田憲子
シニアディレクター	愛媛大学 教授	松本啓治
ディレクター	愛媛大学 助教	片岡由香
客員研究員	東京大学 博士後期課程	大山雄己
客員研究員	(株)復建調査設計	石飛直彦
事務職員	愛媛大学 研究補助員	大野利恵

5-1. みんなのひろばとアーバンデザインセンター

「開かれたまちづくりの場」の創出に向けて

石飛 直彦（客員研究員）

1. はじめに

松山市中心市街地においては、拠点の郊外化に加えて、建物の老朽化や無秩序な自動車交通の流入による環境悪化等により、来街者の減少や低未利用地の増加などの問題が深刻化してきている。

こうした状況に対し、松山市では「歩いて暮らせる集約型のまちづくり」を掲げ、各種取り組みが進められているところであるが、その中で、まちなかに「みんなが気軽に楽しめる公共空間」や「開かれたまちづくりの場」を創出し、市街地の抱える問題解決へのアプローチを試みようとしているのが、みんなのひろばとアーバンデザインセンター（1F多目的スペース）である。

“まちで暮らす人々やまちづくりに関わる人々が集い、あるいはまちの未来像を共に描き、共に取り組みを進める場であり、そこで行われる様々なプログラムを通じて、より魅力的なまちのデザインや賑わい再生等につなげていくための拠点”、という位置づけのもと、松山市の社会実験として、2014年11月1日（土）～2016年2月29日（日）の16ヶ月間設置される予定となっている。

2. みんなのひろば・多目的スペースの概要

2014年11月1日、まちなかの銀天街商店街からほど近い箇所に、「みんなのひろば」と多目的スペースはオープンした。



みんなのひろば・UDCMの位置

約290㎡のひろばには一面に芝生が敷き詰められ、ミニ噴水や手押しポンプ、小高い丘等が整備されているほか、可動式のベンチが設置されている。隣地の多目的スペースには、多目的トイレやテーブル・イス、本・雑誌等が設置されており、ひろば・多目的スペースともに、利用時間帯内は誰もが自由に出入りできる。



みんなのひろば

多目的スペース

【概要】

	みんなのひろば	多目的スペース
利用時間	[月～金] 10:00～20:00 [土日祝日] 10:00～18:00	
お休み	年末年始(12/29～1/3)	
設備等	<ul style="list-style-type: none"> ・芝生広場 ・ミニ噴水 ・土管 ・手押しポンプ ・ベンチ 	<ul style="list-style-type: none"> ・トイレ(多目的・女子) ・テーブル、イス ・本、雑誌等

3. 「みんなのひろば」の設計

2013年、松山市とまちづくりに関わる一般市民とによる勉強会が開催され、まちなか広場を設置するのに相応しい箇所の要件や導入機能などに関する意見交換が行われるとともに、同時期にまちなかの魅力再生と活性化をテーマにしたワークショップも開催され、多くの提案がなされた。2014年には、アーバンデザインセンターのメンバーも加わり、幅広い立場の市民が継続的に参加するワークショップを通して、広場の具体的な設えや活用策、マネジメント方法など多岐にわたるテーマで議論を重ねてきた。



ワークショップの様子

広場設置箇所の検討段階から広場の具体的な設え、その後の活用やマネジメントに至るまでの一連の計画が市民参加で行われてきたことや、参加者側からの一方的な意見・提案に終始しがちなワークショップにおいて、自らが行動することを前提として進められていることは、本取り組みに対する関係者の思いを象徴するものである。

広場の設えを検討するワークショップでは、小高い丘の高さや導入設備も検討され、意見を踏まえて「土管」を設置するなど具体化にまで至り、また、「みんなのひろば」という愛称や、広場の「利用のルール」についても、ワークショップや地元からの意見をもとに生まれている。広場の整備中に偶然に発見された井戸水を活用し、手押しポンプを設置したり、噴水の水に使用するなど、市の柔軟な対応もあって、単なる都市公園ではない、より市民に寄り添う、魅力的な空間となっている。

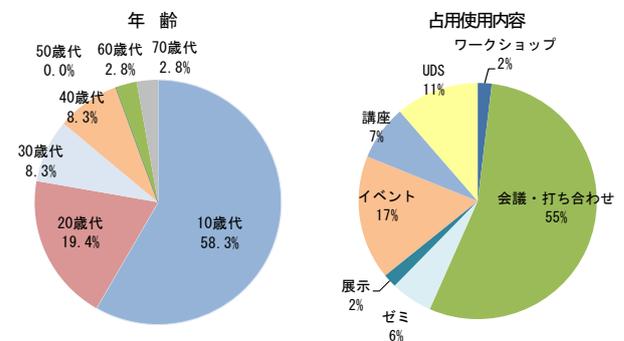
こうした継続的な市民参加の場の創出と意見の汲み取り等により、関わる市民の幅は徐々にではあるが広がりつつある。

その一方で、広場は銀天街商店街の近傍に位置する時間貸し駐車場を転用していることから、自動車によるアクセス利便性の低下と、それによる来街者の減少等を懸念する声が少なからずあるのも事実である。行政と市民との橋渡し役として、肯定的意見に限らず、地元の声を丁寧に拾いあげ、対応していくことがアーバンデザインセンターに求められる役割の一つとなっている。

4. 利用状況（使われ方）

みんなのひろばには、オープン当初の休日において、約300名/日の利用があった。その後、季節的な影響もあり、多少利用者は減少しているものの、平日平均で60人/日程度、休日では200名/日程度の利用が見られる。平日の午前中は、近くの保育園の散歩コースとして園児が楽しそうに走り回り、夕方には高校生の学校帰りの立ち寄り場の一つとなっているなど、駐車場であった時には見られない、和みの光景を周囲に与えている。休日には、買い物ついでの子連れ家族等で賑わっており、商店街からの滲みだしという点においても、良好な使われ方が見られている。

多目的スペースは、設置当初、何をするための施設なのかが見えからは分かりにくかったこともあり、通行者が施設を遠目にみながら過ぎ去っていく、という状況が続いていたが、その後、友達と会話を楽しむ人、子どもに絵本を読み聞かせる人、お弁当を持ち込み食べる人など、利用者は増加しつつある。ただ、利用者の多くが10歳代（中学・高校生）に偏っていることから、幅広い年齢層の利用促進が課題の一つとなっている。



多目的スペースの利用状況（2014. 11～2015. 1）

広場と多目的スペースはともに、申請・審査による占有使用を認めている。施設ではこれまで、アーバンデザインセンターが主催するスクールや、交流会、団体等による会議、ワークショップ、絵画展示などに使用されているほか、ダンスやクリスマス関連のイベントも開催されるなど、オープンから3ヶ月間で延べ53件（参加者延べ約1,000人）のプログラムが実施されている。

広場では、DIYや親子体操、ご当地アイドルのライブなど、屋外ならではの活動も行われており、今後、更に多様なプログラムによる活用が期待される場所である。



左上・下 アーバンデザインスクール
 右上：クリスマスイベント

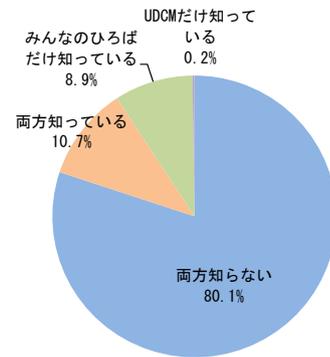
多目的スペースの占有使用の可否は、アーバンデザインセンターに一任されており、社会実験の目的との整合性や公益性の視点から実施判断を行っている。一方、広場の占有使用は、騒音や集客による周辺道路への影響等に配慮し、松山市とアーバンデザインセンター、地元の町内会・商店街組合の代表者等で構成される「運営委員会」を毎月開催し、審査・判断がなされている。運営委員会は、審査を行うだけでなく、地元ならではの気づき・意見を収集する場、地元と関係者間のコミュニケーションを深める場、としても機能している。

5. 改善必要点の把握と効果検証

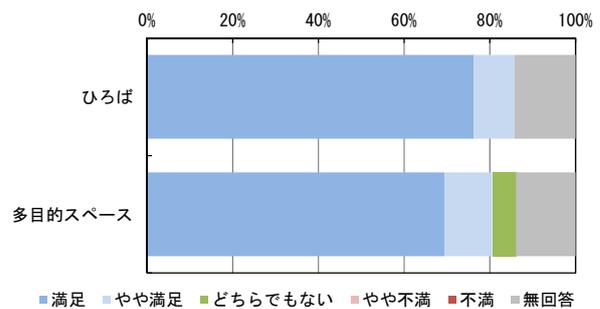
広場と多目的スペースの利用は徐々に進んでいるものの、オープン2ヶ月後に行われた街頭インタビュー調査の結果において、「知っている」という人は1〜2割程度と低く、そのうち「利用したことがある」という人は、極わずかとなっている。しかし、利用者の満足度は非常に高くなっているほか、特に広場ではリピーターの割合が比較的高い。また、まちなかに求める機能として、「トイレや休憩所」という声が多いことから、広場及び多目的スペースの有する機能との整合は図られていることが確認できる。

今後、周辺居住者や商店街店主、事業所へのアンケート調査等の実施も予定されていることから、これら結果も受けながら、取り組みの改善を積み重ねていくことが必要である。効果検証にお

いては、来訪者数や認知度、立ち寄り施設数といったわかりやすい定量的な指標も必要ではあるものの、これら指標値にどんな意味があるのか、広場と多目的スペースの設置に何を期待するのか（何がまちなかにもたらされるのか）などの議論はまだ不足していると思われる。



認知状況（街頭インタビュー調査結果 ※N=447）



利用者満足度（利用者アンケート結果 ※N=57）

6. 今後の課題

みんなのひろばと多目的スペースがオープンしてから約4ヶ月が経過した現在、利用者の増加とともに様々な課題も顕在化してきている。広場内でのゴミの放置や喫煙・ポイ捨てなどのマナー問題から、違法駐輪、広場・多目的スペース前の生活道等への通過交通の流入といった交通問題、実験の認知度や回遊性の向上といった社会実験上の課題など、解決すべき事項が散在している。

また、市民との関わりもワークショップや交流会を通じて広がりつつはあるものの、まだ一部に留まっており、地元や企業との関わりはこれから、という状況にある。何よりも、本社会実験を通して目指そうとしている「賑わい再生」や「開かれたまちづくりの場」をどのように関係者や市民がイメージ・共有化し、市民参加のもとで如何に具体的にデザインしていくのかの、大きな課

題に取り組みなければならない。アーバンデザインセンターは、そのための重要なプレイヤーの一員となることが求められている。

7. おわりに

みんなのひろばがオープンを迎えた当初、道行く人が、駐車場があった場所が広場に変わっている光景を目の当たりにして、驚きの声をあげ、友達どうしで「良くなった」と言い合う姿を何度も目にした。近所に住んでいるという高齢者は「子どもの楽しそうな声を聞けるのがうれしい」と言い、偶々通りかかったという中年男性は、「かつてはこういった自然に人が集まる場所がどこにでもあった」と懐かしそうに話しかけてきた。また、ある人は「まちなかに落ち着いて休める場所が無い」といいながら、安心したかのように多目的スペースのイスに座った。一方で、多目的スペース前の道路を毎日通るといってお年寄りも、施設がきれいすぎて入りにくいと言って、何度勸めても入ってこない。こうした賛否様々な声を直接聞けることも、一つの効果であるように思う。

産業技術の発展は、我々に「利便性」をもたらし、今や買物に出なくても自宅に物が配達され、パソコンでおしゃべりができ、様々な場所をネットで見て、旅行や散策した気分になれる時代になったが、その利便性は、まちなかに出向く理由を無くし、パソコンができない人のコミュニケーション機会を無くしつつある。また、市民が郊外に移り住み、それに伴い都市機能もまちなかから流出した結果、まちなかでの回遊は減少し、賑わいの喪失を招いている。

こういったまちなかの課題に対して、みんなのひろば・アーバンデザインセンター（多目的スペース）という空間と、そこでの活動に何をどこまで期待し、どうアプローチするのか、現時点において関係者間で十分共有化されているとは言い難い。

「開かれたまちづくりの場」の創出に向けて、活発な議論と実践を図っていきたい。

共同研究者

東京大学大学院工学系研究科 大山雄己（愛媛大学客員研究員）

復建調査設計株式会社 平井健二

5-2. 道後温泉活性化基本計画策定

魅力的な空間整備に向けて

松本 啓治（シニアディレクター）

1. はじめに

道後温泉は日本最古の温泉といわれ、大国主命の神話と共に聖徳太子をはじめ、多くの皇族の行幸が伝えられている歴史性豊かな温泉であり、壮麗な三層楼の本館は、幾多の苦難を乗り越え初代道後湯之町町長伊佐庭如矢によって明治27年落成された。以来松山観光の目玉として人々の注目を集め、120年経った今日でもその魅力は色あせない。

平成15年からスタートした『坂の上の雲』のまちづくりで、本館前の道路は付替えられ観光客に開放された。東側には東屋が設けられ、又新殿の視点場となった。石畳歩道や照明柱、車止めなどの意匠と民間建物のファサードが本館と一体となって景観を創りだしている。

昨年は改築120年（大還暦）を記念した「道後オンセナート2014」が開催され、瀬戸内海国立公園80周年、四国霊場開創1200年も相まって、道後温泉は活況を呈した。

しかしながら、一方では本館の老朽化が進行し、安全性・耐震性が懸念され、本館の改修が急務となっている。

2013年1月「道後温泉活性化審議会」において「本館改修時における入浴客の受け皿となる代替施設には、「椿の湯」の改築を最良とする」答申が出されたところである。この答申を受け、市では2017年愛媛国体を目標に本館の代替施設を建設すると共に道後温泉活性化基本計画を策定し、ハード・ソフト両面から道後地区の活性化に取り組むこととなった。



2. 計画策定の体制

市では道後温泉活性化を検討するために「道後温泉活性化審議

会」を立ち上げ活性化計画の審議が行われている。

さらに、地域との意見交換を進めながら、より効果的な施策立案をおこなうため「道後温泉活性化懇談会」が立ち上げられ計画の熟度を高めてきた。

アーバンデザインセンターでは市から道後温泉活性化基本計画策定委託を受け、懇談会の議論を踏まえ、東京大学羽藤研究室・復建調査設計（株）と共同で松山市道後温泉事務所と綿密な連携をはかり計画づくりを進めてきた。

さらに基本計画の実効性を担保するため、実施設計の担当部局となる都市整備部との協議・調整を進め、実施に向けての細部の打ち合わせを行い、関係部長で組織する「道後温泉活性化庁内委員会」に諮り計画の周知をはかってきた。

計画づくりの中で特筆すべきことは、道後地区を対象地として大学生や若手実務家のU30による都市計画設計提案競技「風景づくり夏の学校2014」を企画開催し、好評を得たことである。

これらの提案は基本設計に反映され、U30のメンバーは計画の具現化の中に参画することとなった。

3. 椿の湯周辺景観整備計画

椿の湯は、昭和28年「第8回国体」開催時に開設され昭和59年の改修を経て今日まで市民の湯として長く親しまれている。

新たに建設が予定されている新湯は本館改修時の代替施設として現・椿の湯の敷地を拡張して新築されるもので、道後の新たな「光」として大きな期待が寄せられている。完成が予定されている平成29年には「第72回愛媛国体」の開催が決定しており、多くの観光客の来訪が見込まれている。

この新湯の建設に合わせて温泉情緒あふれる憩いの空間を創出するため、椿の湯周辺の景観整備を計画することとなった。

- ① 無電柱化②道路空間の高質化③周辺建物のファサード整備が考えられた。



① 無電柱化

無電柱化には道路管理者が行う電線共同溝方式や要請者が負担する要請者負担方式あるいは軒裏配線などがあるが、当地区の特性から要請者負担方式が妥当であろう。地中化には、埋設する管路空間や地上機器の設置場所が必要であるため歩道空間（2.5m）を設けなければならない。短期的には椿の湯周辺の無電柱化が優先されるが、将来的には回遊性の向上、景観の向上のため、県道六軒屋石手線まで延長することが望ましい。

② 道路空間の高質化

新湯中庭とひとつなぎになったおおらかな空間とするため、周辺道路空間の高質化を行なう。具体的には自然石による高質舗装やポラード、照明柱の設置、長尺ベンチなどの休憩施設の設置などを行なう。

高質舗装に併せて、老朽化している地下埋設物（ガス管など）の更新が必要である。

③ 沿道建物のファサード整備

新湯の外観に合わせて道後温泉らしい憩いの空間を演出するため、沿道建物の景観を整えていく必要がある。長期的には耐震性・耐火性に優れた建物に更新すべきであろうが、短期的にはファサードの整備で対応するほうが理解が得られやすい。

ファサードを整備する上で制約となるのが道路の建築限界（4.5m）である。そのため庇や張り出しのサインは設置せず、建物の色調や屋上ルーバー、暖簾、格子などでアクセントを出していく。

4. 上人坂の整備

道後地区の宝の1つ宝厳寺が平成25年8月焼失、その復元に向け関係者の努力が続き、平成28年3月復元が予定されている。

道後地区の歴史的・文化的なポテンシャルはきわめて高く、民間企業の投資意欲も高いことから、宝厳寺の復元にあわせた町屋の整備が求められる。

この通りは戦前までは遊郭街として賑わっていた歴史があり、当時の建物の格子戸や手摺をデザインコードに取り入れることが考えられる。

低層で連続性のあるシックな和風建築を整備し、道後商店街とは競合しない多様な業態を導入する。温浴施設や食事スペース、小規模の宿泊施設や集客施設等を設ける。

上人坂の道路整備は将来の無電柱化に配慮し、5mの車道と歩道（2.50m）を整備し、歩道面は自然石舗装とし、民地のセットバックにより自然石階段を設け変化を付ける。ポラード等照明施設で光の演出をおこなう。



5. 本館・冠山の整備

冠山が緑生い茂る山であったことは明治期の絵図等で確認でき、湯神社が鎮座する神の山として知られている。圧迫感のある石積は昭和39年温泉センターが開設されたときの工事で設けられたものであり、上部は道後温泉の附属駐車場として利用されている。風景づくり夏の学校でも参加者の多くが冠山を最も整備すべきエリアとして提案していた。

将来的には、冠山の駐車場を廃止し、広場整備を行い観光客の憩いの場として、イベント広場や本館の視点場整備、足湯、茶屋、花畑などを整備することが考えられるが、緑豊かな空間に再整備するのは至難の業である。



6. 駐車場・駐輪場の整備

道後温泉及び宿泊施設への車のアクセスは県道道後公園線から県道六軒屋石手線に集中している。

ホテル・旅館利用者の駐車は、ホテル敷地内580台、ホテル敷地外に804台が駐車しており、日帰り客が主に利用する公共駐車場は、本館に隣接する冠山100台、本館から400mの位置にある祝谷東駐車場43台、700mの位置にある臨時駐車場180台がある。

アンケートによれば、駐車場の位置は本館から5分圏内を希望する人が約6割で、潜在的な需要にも配慮すると5分圏内での駐車場の整備が喫緊の課題である。

また、現時点でも駐車場を必要としているホテル経営者も多く、さらに耐震化によるホテル建て替えを契機にフリンジ駐車場の建設を求めるホテル経営者も多い。

そこで需要予測に見合う道後駅周辺や椿の湯周辺、上人坂周辺での民営フリンジ駐車場を整備すべきである。

駐輪場については、地元客が多い椿の湯周辺、商店街への来街者駐輪場の整備が必要と考えられるが、椿の湯の付属駐輪場の実態調査では、来浴者の駐輪よりも近隣の従業員等の駐輪が多いのが実態である。

従業員用の駐輪場の整備が求められるが、まち駐輪場としてまち全体で考えていくことも必要であろう。

新湯については附置義務駐輪場も必要であり、近隣に道後温泉付属駐輪場の整備が求められる。



7. その他の整備

県道六軒屋石手戦沿いには多くのホテルが立地している。ほとんどのホテルが前庭に駐車場を設けているが、自発的な景観計画

区域が設定されており、耐震化による立て替え時には、建物の景観と共に前庭に植栽等を施すなど、景観に配慮して、経営者の努力によって街の景観を創り上げていかねばならない。



8. 道後商店街まちづくり勉強会

平成26年12月～翌1月にかけて道後商店街周辺地区の意識調査を行い、58軒の協力が得られた。その結果、昭和57年以前の旧基準で建てられたものが約半数を占め老朽化が進み、安全性・耐震性に6割の方が不安感を持たれている。延焼には9割の方が危険性を意識されており、建物の更新を検討する必要性が生じている。

このため、商店街の建物更新をどのような手法で進めていけばよいか勉強会を進めている。

基本的な考え方として都市部で行われている法定再開発や地区計画、優良建築物等整備事業などの共有化・高度化などを目指すことには否定的な所有者が多く、自己の建物を更新していく過程で赤道・水路を活用した裏界線（裏路地）の整備、アーケード内の特に2階部分のファサードを格子等でアクセントを出していく方法などを検討していく。



共同研究者

東京大学大学院工学系研究科

大山雄己（愛媛大学客員研究員）

東京大学大学院工学系研究科

芝原貴史（東大羽藤研究室所属）

復建調査設計株式会社

石飛直彦（愛媛大学客員研究員）

5-3. その他の実践的取組み

新階 寛恭（副センター長）

「みんなのひろば」や道後温泉地区以外にも、下記に示す通り、松山にとって戦略的に重要な複数の地区に対して、実践的なデザインアドバイス等を行った。

(1) 一番町大街道口景観整備へのデザインアドバイス

国道11号と大街道との交差点にあたる、いわゆる「一番町大街道口」は、近世に成立した松山城下町において武家町と町人町の境界に位置し、その当時から人の往来の拠点となっていたところである。明治以降、道後温泉に通じる軽便鉄道の起点になったこともあり、芝居小屋ができるなど盛り場としても栄え、今も松山の賑わいの玄関口とも言える、象徴的な場所である。

しかし近年、隣接する商業施設の更新等を契機に、交差点周辺空間全体の景観整備の必要性が高まっていた。

そこで松山市では、地元や行政関係者等で構成される専門部会を7月に立ち上げ、この玄関部分の交差点周辺の景観整備を検討することとなった。UDCMはこの専門部会に参加し、松山の賑わいと魅力ある空間づくりに向けてデザインアドバイスを行った。

半年余りにわたる検討・アドバイスの結果、アーケードの改修デザインおよび、待ち合わせ等の広場的空間デザインの質の向上が図られた(図1)。今後、周辺の再開発等と連携して、空間全体の調和が図られるよう、継続的なコーディネート、アドバイスが求められている。

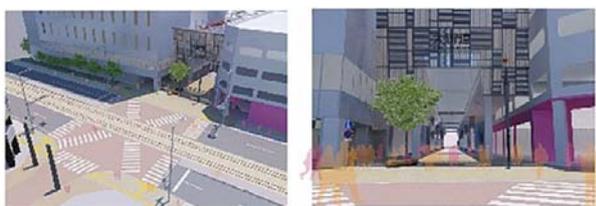


図1. 広場およびアーケード改修デザイン（最終案）

(2) L字地区再開発構想へのコーディネート

まちなかひろばを含むいわゆる「L字地区」は、大街道商店街と松山銀天街の交差点という、地域に根ざした商業エリアの中心に位置し、松山のまちづくりにとって立地上、重要な箇所の一つ

である。

しかし近年、商業機能の郊外化や建物の老朽化等に伴って、街としての魅力が低下しつつあり、賑わいの衰退が顕著になっている。このような危機感から、地元において再開発の機運が盛り上がり、法定再開発事業の立ち上げに向けた検討が行われているところである。

7月以降、UDCMはこの基礎検討の場に参加し、コンセプトづくりや空間配置イメージ検討等へのコーディネート・アドバイスを行った(図2)。その結果、一部有志による任意の組織が、地元地権者等全体で構成される協議会組織へと発展的に移行すべく準備中である。



図2. 空間配置イメージ（素案の一例）

(3) 花園町通り景観整備へのデザインアドバイス

花園町通りは松山中心部の西側外縁の一角を占め、伊予鉄松山市駅と城山公園とを結ぶ、松山市の顔の一つとなる重要な区間である。またイチョウ並木と副道のある広幅員の街路で構成される空間に路面電車が通ることで、上質な都市景観が形成されている。

しかし近年、沿道において商店街建物やアーケード等の老朽化に伴い、撤去・改修の必要も生じたことから、地元において建物群の更新を念頭においた景観整備の検討の動きが起こっていた。

そこで今年度から、UDCMは地元の要請を受けて景観検討へのアドバイスを行うこととした。

6-1. アーバンデザインスクールの開講

松山まちづくりの担い手育成を目指して

羽鳥剛史（副センター長）・片岡由香（ディレクター）

1. はじめに

2014年11月末より、松山市のまちづくりの担い手育成を目指して、「アーバンデザインスクール」を開講した。このスクールは、学生から一般市民まで、まちへの思いを持った幅広い世代が集い、参加者自らが柔軟な発想と方法によりまちづくりを企画・実践する中で、まちづくりの進め方を学んでいく、市民参加型・体験型の学習プログラムである。具体的には、地域の方々との交流を深めつつ、まちづくりの企画からワークショップやまちづくり活動の実践に至るまで、まちづくりに関わる一連のプロセスを体験し、まちの歴史や文化に根ざした、松山市ならではの魅力的なまちづくり活動につなげていくことを目指している。

2. スクールの基本理念～学びの視点～

本スクールでは、以下の基本理念に則り、まちづくりの学びの場を創出することを目指している。

- ① まちの「楽しみ型」を学ぶ。
- ② まちづくりの「学び型」を学ぶ。
- ③ まちづくりの「活動」を実践する。

第1に、参加者は、まちの「担い手（＝楽しませる人）」と「ファン（＝楽しむ人）」の2つの立場を体験し、双方の視点を折り合わせながら、松山市ならではの多様で恒常的な（一過的に終わらない、自己満足に終わらない）「まちの楽しみ型」を発見することを目指す。

第2に、参加者は、「いかにしてまちづくりを学ぶことができるのか」を自分自身で考え、その方法を実践しながら、自分達でワークショップやレクチャー等の発案・企画・運営に取り組む。こうした自主設計型の学習プログラムを通じて「まちづくりの学び型」を体得していく。

第3に、本スクールでは、単なる提案だけに留まらず、地域における具体的な「活動」の実践を一つのアウトプットとして捉え

ている。こうした実践活動を通じて、松山市が魅力的で誇りある街に一歩一歩近づくこと——そうした将来への発展に僅かなりとも、しかし着実に貢献することを目指している。

3. スクールの体制

アーバンデザインスクールの開講にあたっては、愛媛大学の羽鳥剛史・片岡由香、松山大学の河内俊樹、聖カタリナ大学の徳田剛、松山東雲女子大学の直井玲子の4大学5教員で話し合いを重ね、スクールの目的や進め方を定めた。そして、アーバンデザインセンターの開設に伴って、4大学の学生及び広く一般の方々を対象に本スクールの第1期生を募集したところ、合計34名の申し込みがあり、本スクールが始動した。

本スクールの実施体制を図1に示す。スクール生は、各自の興味のあるテーマに基づいてグループに分かれ、各グループでの話し合いを通じて、まちづくりの企画や実践に取り組んでいく。アーバンデザインスクール運営委員会は、上述の4大学5教員から構成されており、本スクールを運営すると共に、まちづくりの基本的な進め方を指導し、スクール生の活動をサポートする。また、本スクールを進めるにあたっては、松山市都市デザイン課にご協力頂くと共に、松山市のまちづくりにおいて活躍されている方々に「まちなかスクールアドバイザー」に任命し、適宜、スクール生にアドバイスを享受頂くこととしている。

4. スクールのプログラム

本スクール初年度は、2014年11月から2015年8月まで、図2のプログラム（今後の予定を含む）に沿って、松山アーバンデザインセンターにて隔週（一回約2時間）で行うこととしている。本プログラムは、大きく前期（2014年11月～2015年3月）と後期（2015年4月～8月）に分かれており、前期では、講師によるレクチャーやワークショップを通じて、まちづくりの基本的な進め方について

理解すると共に、まちの課題を発見し、その課題解決に向けた「プログラム企画書」（自分達でどのようなことが出来るのか）を作成し、後半の進め方について発案してもらう。後期では、前期で作成した「プログラム企画書」を基にして、それぞれのテーマについてワークショップやまちづくり講座を受講者自身が開催しつつ、まちづくり活動を実践していく。

5. これまでの取り組み

2014年11月21日の本スクール開講日には、スクール生が一堂に会し、松山市に対する思いやまちづくりへの意気込みを語り合った。そして、11月29日には、アーバンデザインセンター周辺のまちなかを皆で歩いて回り、そこで発見したことを発表し、まちなかの魅力や課題について話し合った。その後、各講師より、マーケティングの視点からのまちづくり（河内俊樹, 2014年12月5日）、演劇ワークショップを活かしたまちづくり（直井玲子, 2015年1月9日）、災害ボランティアとまちづくり（徳田剛, 2015年1月23日）に関わるレクチャーを受けて、多様な観点からまちづくりのあり方や方法について学んだ。このレクチャーと同時に、スクール生は、自分達の興味のあるテーマについて話し合い、テーマごとにまちづくりを進めていくためのグループを構成した。現在、『香りを活かしたまちづくり』『食と文化のまちづくり』『道後まち歩き』『アートのまちづくり』等、チャレンジングなテーマを掲げて、プログラム企画書の作成に取り組んでいる。今後、本プログラムの前半の締めくくりとして、この企画書の内容を基にして、自分達でどのようなまちづくり活動を行っていくかを一般の方々に宣言するプレゼン会を開催し、実際にまちづくり活動を開始する後半に突入する予定である。

スクール生は、まちづくりの難しさを日々感じつつも、仲間達と共に、松山市の魅力向上に向けて熱意をもって取り組んでいる。皆様、スクール生の今後の取り組みに是非ご期待頂きたい。



写真1. スクールの様子

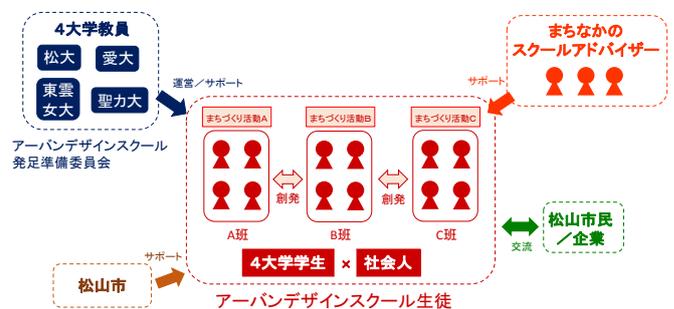


図1. アーバンデザインスクールの体制

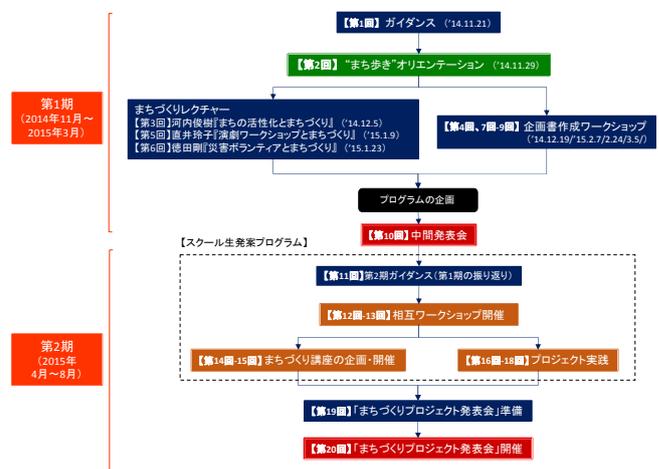


図2. スクールのプログラム

6-2. 風景づくり夏の学校 2014 の取り組み

片岡 由香 (ディレクター)

1. はじめに

平成26年9月20日に愛媛大学の南加記念ホールにて、「U-30 都市計画-都市設計提案競技 風景づくり夏の学校2014-道後温泉 移動風景の再生と展開」の最終審査会を開催致した。本競技は、UDCMと東京大学復興デザイン研究体との共催で、全国の30歳以下の学生や建築家などの若い方から、道後を対象に、今後どのようにしていけば魅力的な地域になっていくのかについて、様々な視点からアイデア提案をいただくものであった。

全国から提案を募集し、14チームから案の提出があり、その内の6チームが1次審査に通過し、愛媛大学での最終審査会にて非常に高度な提案内容を発表した。

2. 本企画の趣旨と審査までのプロセス

本企画は、UDCMが道後温泉活性化基本計画について計画づくりの協力をしてきたこともあり、また、道後温泉地区が抱えている課題（道後温泉本館の改修工事など）については、多面的な解決策が必要となるため、より多くの視点によるアイデアを全国から募集することを目的に企画したものである。

本競技は、提案募集と審査だけの企画ではなく、スクール形式の珍しい競技として実施した。まず、平成26年7月26日には、共催の東京大学にて、本競技の審査委員長である羽藤英二センター長による課題説明会と審査員による講義を実施した。審査員からの講義については、青木淳氏（建築家）より、「空間と移動、人はなぜ移動するのか」をテーマに、後藤春彦氏（都市計画家・早稲田大学教授）より、「自治と空間、城崎から考える」をテーマにお話いただいた。

また、道後温泉地区では平成25年に宝厳寺が火災で焼失し、加えて、この地区を含む愛媛県においては、南海トラフ巨大地震の発生が今後予想されていることから、事前復興や防災の観点からも計画を考えていく必要がある。本競技においても、提案を考え

る上でこのような視点についても検討して欲しいという思いから、参考になる事例について東京大学復興デザイン研究体メンバーより報告を行った。同研究体からの報告としては、陸前高田、福島、静岡などの地区を対象とした計画提案について、学生よりプレゼンテーションが行われた。



写真1. 審査員による講義風景

その後、本競技が対象としている道後温泉地区について、その概要と歴史についてUDCMの片岡より説明を行った。また、山口敬太氏（京都大学）から「地域デザインを読み解く」、吉谷崇氏（設計領域）から「土木デザインから考える」、黒瀬武史氏（東京大学）から「空地を生み出すデザイン」という、それぞれの専門分野によるテーマでお話いただき、本競技に参加する上で示唆に富むミニ講義が連続して実施された。



写真2. UDCMシニアディレクターによる挨拶

また、より対象地である道後地区を理解してもらうため、7月29日には道後温泉旅館協同組合、道後温泉誇れるまちづくり推進協議会、松山市やボランティアガイドの方にご協力をいただき、現地説明会を開催した。現地説明会では、道後地区での現在進め

られているまちづくりの取組み紹介、地元が考えている地域の課題、観光振興の取組みなどについて説明をいただき、まち歩きツアーも実施した。



写真3. 現地まち歩きツアーの様子

提案の提出後、1次審査通過者は、9月19日-20日の間、道後温泉地区に滞在し、後半のプログラムに参加した。

後半プログラム1日目(9月19日)は、審査員の藤田香織氏(東京大学)から「木造建築の風景」、窪田亜矢氏(東京大学)から「地域デザインの展開」というテーマでの講義があった。その後、道後の地域の方々や観光客、市民に向けて、街頭でパネルを使ったプレゼンテーションを参加者が実施し、自分達の提案が地元でどのような反応があるのか確かめる機会を設けた。



写真4. 審査員による講義 in道後



写真5. 地元向けプレゼンテーション

3. 最終審査会と審査結果

翌日には、審査員の内藤廣氏より、「成熟しない街造り」というタイトルで基調講演をいただいた。また、審査員や会場の参加者が提案内容についてより深く理解できるようにするため、パネル

プレゼンテーションの機会を設け、その後に最終プレゼンテーションおよび審査会を実施した。その結果、7チームが入賞(その内、1チームは地元枠として入賞)し、最優秀賞には、早稲田大チームの「道後六物語」が選ばれた。



写真6. パネルプレゼンテーションの様子



写真7, 8. 最終プレゼンテーション、審査会の様子

4. 設計競技終了後の取組み

本競技は募集テーマを絞らない代わりに、参加者に地域の歴史やアーバンデザインについて学習してもらいながら提案をいただくという、新しい手法で実施した。入賞者による提案内容については、12月1日に地元向けにプレゼンテーションとワークショップを実施し、それらの結果も踏まえながら、道後温泉活性化基本計画へ反映させた。詳細については、5-2で示す通りである。

提案内容については、平成27年3月23日~4月12日まで、坂の上の雲ミュージアムにて展示会を実施し、3月27日においては、UDCMディレクターと提案者として、設計競技の振り返りとして座談会を実施した。



写真9. 道後でのワークショップの様子

7-1. アーバンデザイン研究会

第1回「復興とアーバンデザイン」

松山アーバンデザインセンター + 東京大学復興デザイン研究体

1. はじめに

研究機関としての知識の養成を目的とし、アーバンデザイン研究会を企画した。第一回は「復興とアーバンデザイン」をテーマとし、東京大学復興デザイン研究体のメンバーと議論を行なった。

-
- ・日時：2014年12月3日（水）15:00-18:30
 - ・場所：松山アーバンデザインセンター1階
 - ・登壇者：江川直樹氏（関西大学）、羽藤英二氏（東京大学）、吉野大介氏（復建調査設計、復興デザイン研究体共同研究員）、浦田淳司氏（東京大学）
 - ・テーマ：「復興とアーバンデザイン」
-

2. 第一部：復興デザイン研究発表

・浦田淳司（東京大学）「災害時の世帯間相互作用の形成と避難開始への影響 -2004年新居浜市豪雨災害を対象として-」

災害時・災害後に起きた事実及びその原因を、研究を通じて知ること、それを災害前の計画に生かしていくこと（事前復興）を考えている。特に、災害時の避難開始のスピードに周辺他者の避難状況が影響を及ぼしていることに着目し、ネットワーク形成モデルを避難研究に適用した。避難開始を試みる意思決定者と空間的に同等のリスクを持つ範囲を「近隣トラス」として定義し、その影響を定量的に把握するモデルを構築した。2004年の新居浜市豪雨災害を対象として、ヒアリング調査から得られた当日の避難実施状況をもとにネットワークの形成要因とその時系列的变化を分析した。その後、モデル推定を行なって他者の避難状況が避難開始時刻に大きな影響を与えていることを確認した。

・吉野大介（復建調査設計、復興デザイン研究体共同研究員）「東日本大震災の事例から学ぶ災害時のモビリティ確保」

災害後、日常生活における各種サービスの提供・受給のためには地域のモビリティ確保が重要な課題となる。陸前高田市では2011年の東日本大震災によって市街地のほとんどが失われたが、復興の過程で生活の拠点が高台に移った。人々は車を失い、応急仮設住宅に移住したが、市内に点在する仮設住宅と高台の生活拠点の間のモビリティをどう確保するのが大きな課題となった。

モビリティの復興プロセスを考えると、緊急対応期（緊急的な輸送）・応急期（最低限の生活のための移動手段確保）・復旧期（日常生活再開のための移動手段確保）・復興期（仮設住宅や移転先における生活交通の確保）と分類することができ、陸前高田市では各期においてさまざまな問題が発生してきた。

緊急対応期においては交通事業者の業務量が増大する一方で人員は不足し、応急期～復旧期では地域住民の経済的負担を考慮して低廉な料金設定が行われる中で、事業者の採算性、人員不足、燃料・車両不足など満足なサービスを提供する体制が確保できていなかった。復興期では、プロパー職員が不足し、年度ごとに入れ替わる職員に対する業務教育や、国庫補助の限界などの問題が発生した。こうした観点から、災害前の段階で自治体や交通事業者の被災を前提としたモビリティの再建計画、災害シナリオ、必要なリソースの確認などが教訓としてあげられる。災害時にこそモビリティの課題が浮き彫りになることを前提とした、計画や補助の位置づけが必要だろう。



写真：研究発表の様子（左：浦田／右：吉野）

3. 第二部：江川直樹氏講演「集まって住む環境の再生～阪神・淡路大震災の復興プロジェクトから～」

阪神淡路大震災の復興プロジェクトを中心に話す。エトローレ・ソットサスのいう「建築家は場を考える」という言葉が原点。場所のポテンシャルを探り出し、それを社会化することが専門家としての仕事だと考えている。ゲニウス・ロキ（場所の呼びかけ）を理解するようにすべての存在が「どうなりたがっているか」、「人と場所」との共生が重要だと考えている。

日本では戦災復興から、大きく解くことが重要だった。しかしこれからは小さく解く、混ぜて解くということが重要だと思う。

「マス＝集まり、ボリューム＝量、スケール＝規模」を認識しながら、大きいものを分解し、小さなものを連続させる操作がある。

「親街路性」という言葉を考えている。伝統的集落は沿道性が高い。建物を作るときに、同時に街路を作っているという意識が重要。20世紀的なセットバックは本当に必要なのだろうか。街の中に人気（ひとけ）がないことは良くない。ヨーロッパの過疎の集落でも人の住んでいる気配がある。

「親空性」：いかに空とつきあうか。ヨーロッパでも庁舎だけは高く、自分たちの住んでいる町が見られる。高さ制限では足元が詰まってしまう。サオルジュ、ソスペル、ペイユなどフランスの集落では路地でも日が差す。高い低いはあるけども調和している。

JR兵庫駅のプロジェクト。都心の空洞化を解消するための公的賃貸住宅。運河を引き込んだ。足元はレンガ造りの2階建。高層・中層を混ぜて作ると日が差してくる。今回はマスターアーキテクトかつブロックアーキテクトでやった。駐車場も鉄骨耐火鋼で線路沿いに作った。街の文脈に沿った動線の処理をしている。

南芦屋浜震災復興公営住宅。六甲山の景を確保したかった。単純な断面だが、人はパースペクティブに見るのであまり単純には見えない。コアの配置を南側にし、歩道を住宅側に引き込んだ。

JR六甲道駅南街区。震災後すぐの案と住民の反対した街区型の案。西側の一棟を設計した。4棟で分棟にし、50戸ずつの共同中庭を持たせた。敷地も工事も別だが通路はつながっている。

芦屋市若宮地区住宅改良事業。密集市街地のクリアランスの図面を渡されたが、これはまずいと思ってまちづくり協議会を作っ



写真：江川先生の講演を熱心に聞く聴講者たち

て協議した。公営住宅を街の中に埋め込み、隙間に路地を残した。最上階（4F）には集会所。街を見渡せる場所。公営住宅を公営住宅のように見せるのが一番いけないと思う。公営は道から少し下げて角度を振ることで、戸建に埋め込まれたように見せる色、素材を切り替えてファサードを小さく文節する。階段の位置にも気をつけて、登ったら六甲山が見えるなど景から設計している。

4. 第三部：討論

江川氏の講演内容を踏まえて、東京大学羽藤英二教授のコーディネートのもと、出席した松山市職員、アーバンデザインセンターメンバー、学生（愛媛大・東大）らを交えて討論会を行なった。

まず、工事費や容積率などの基本的な設計要件や、江川氏の設計思想についての質問がなされ、欧州やアジア、そして松山の街並みを引き合いに討論が行われた。また、土木・都市・建築の分野間の計画における手法論の違いなどの内容にも発展し、スケールの異なる多層的なまちづくりの進め方・仕組みについて議論することができた。

5. まとめ

震災復興という極端な局面だからこそ、計画やデザイン、その仕組みづくりには過去の経験を生かす柔軟さと、問題に固有の新しさ、そしてスピードが求められる。今回、そうした状況における手法論を議論する中で、松山のまちづくりにとっての課題が有事/平時を問わず見えてきたように思う。

今後もテーマを変えながら継続的に研究会を行い、多方面からの専門的な視点を養い、アーバンデザインセンターの取組に活かしていきたい。

7-2. アーバンデザイン研究会

第2回「社会基盤と建築における都市形成史研究の可能性を考える」

松山アーバンデザインセンター + 東京大学復興デザイン研究体

1. はじめに

第二回は「社会基盤と建築における都市形成史研究の可能性を考える」をテーマとし、東京大学にて議論を行なった。

・日時：2015年1月31日（土）14:00-18:00

・場所：東京大学工学部1号館4階411教室

・登壇者：山口敬太氏（京都大学）、中村優子氏（ウィスコンシン大学）

・テーマ：「社会基盤と建築における都市形成史研究の可能性を考える」

2. 山口 敬太（京都大学）「水路とその利用システムから読む都市の空間組織」

歴史研究と計画をどうつなげるかをテーマとしている。モノ、意味、システムをどう読むのか。

空間と水の利用は結びついていると考え、水路の張り巡る琵琶湖の集落・伊庭を対象地とした。資料は歴史地図、事業に関する一次資料、インタビュー調査から得られたデータ。

伊庭では水路を守ろうとして、車社会の流れで一度は失敗したが、2010年前後から活動が再開された。景観への無意識の壁を取り払うことから始まり、八景を集めてニュースレターにした。遺跡は残っても暮らしに繋がらない。どう計画に反映させるのか。

空間組織をどう読むのか。地割と住宅構成・水路の巡らし方が対応している。どの家も水路からアクセスできる。川との関係から玄関ができていて、水路側に庭や風呂、農具置き場がある。現在では、使わなくなった田舟の廃材を使った蔵などが街ではみかけることもできる。

今、「歴史風土の尊重をいかに計画論として立てるのか」とい

うことを考える中で、歴史を現代的に翻訳し、計画に生かすために専門性の高い調査による価値のあぶりだしが必要だと考えている。

モノというのは実態で、意味は価値と記憶の問題である。これだけだと運動論であるが、システムとしての合理性を作らなくてはならない。

・議論

まず、空間の再生をどう行うのか、空間の使われ方から、モノ・空間と関係する経験や記憶についての議論について発展した。

また、日本の歴史保全の問題について議論が行われ、集団の意思決定や計画の方法論を参加者たちで考えることができた。

3. 中村 優子（ウィスコンシン大学）「ヴァナキュラー建築の研究手法とその展開 –都市の中の建築史–」

Vernacular architectureの定義について。「Common Places」はヴァナキュラー建築に関する論文をまとめた本。定義は難しいと書いている。vernusが奴隷、女性形がverna。変形してvernacularとなった。William Barlowが1601年に書いた使い方が初出だそうだが、定まった定義は存在しない。urban morphologyと比べて小さなスケールを対象にし、周りをcontextとして捉えている。

Milwarkeyのboulevard innというレストランの移転・改築について。2003年の閉店まで3回の移転と40回以上の増改築をした。オーラルヒストリーを中心に、新聞、写真、エフェメラ、建築改築申請資料等を用いて街を作る個々の要素が周囲のcontextからどう影響を受けているか明らかにした。

・議論

建築空間からのアプローチであったが、その生業・文化が街路

アーバンデザインセンターは市と協力して都市計画を担うだけ



写真：研究会の様子（左：山口氏発表／右：中村氏発表）

に与えた影響、街路から受けた影響などについて議論がなされた。また、周囲の建築やまちの状況であるContextと、個々の建築が起こすActionは関係していることにも言及がなされた。

また、研究の手法としても個別の建築を定点観測する調査の発展可能性や、顧客・コミュニティとの関係などについて議論された。

4. まとめ

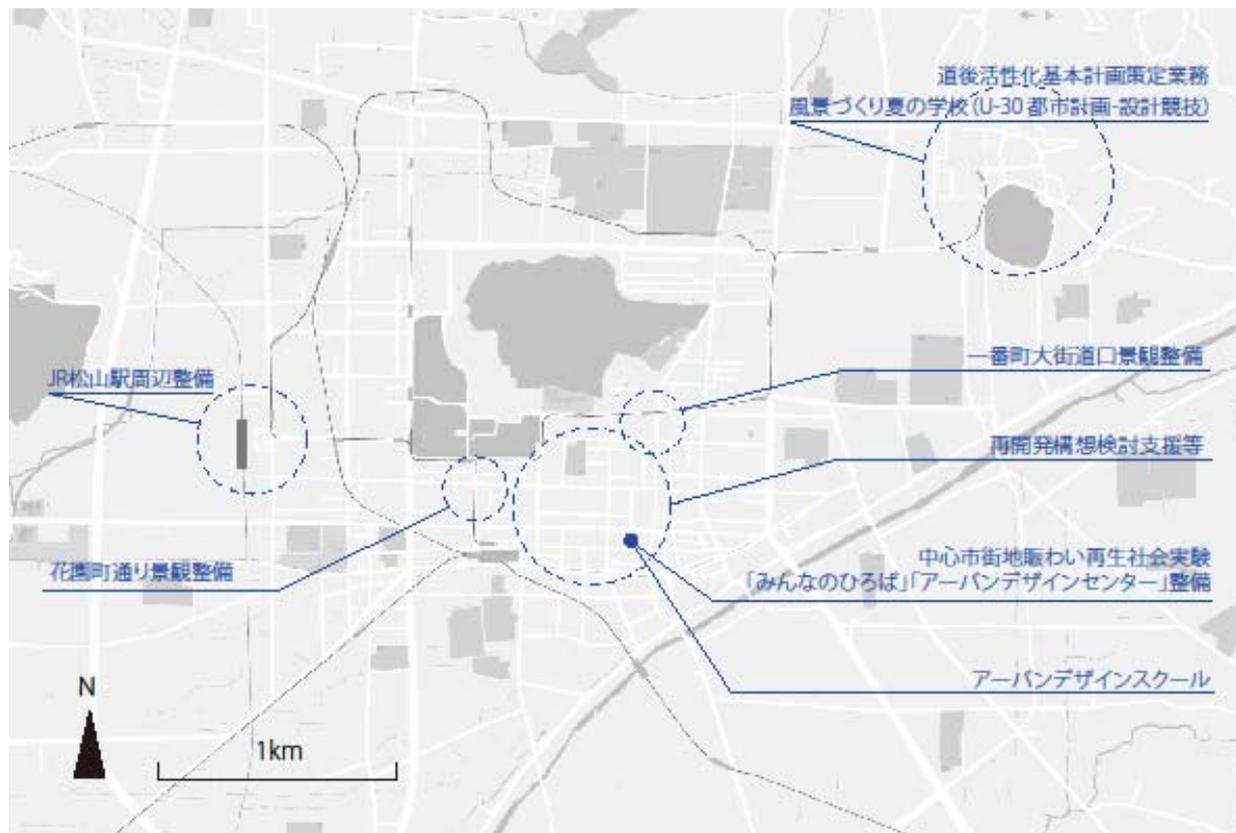
その都市の歴史を知ることは、まちに興味を持ち、まちを考える大きなきっかけとなる。ただ、その歴史を現代の計画にどう生かすのかは難しい。

それに対して、今回発表いただいたお二方は、「空間組織」という街を構成する詳細な単位からのアプローチにより、建築空間、建築群、街路、水路、…それぞれの関係性を捉えた。さらにその関係性の歴史的な変化を見ることで、空間の意味やシステムを発見し、計画論に活かそうとしていた。

松山のまちなかでも、商店街には空き店舗が増加したり、周辺の低未利用地が次々と平面駐車場に変わったりと市街地の衰退が進んでいる。こうした細かな変化は、周辺のContextやコミュニティ、より大きなまちの計画に関係していることだろう。

でなく、まちなかに拠点を構えることで地域住民の話を汲み取ることができるように、都市のシステム（構造）と組織を同時に見ることができる。その強みを生かしていきたい。

8-1. 活動フィールド



活動履歴

2014. 5. 8: 一番町大街道口景観整備実施設計他業務委託選考委員会に参加(松山市役所)
2014. 5. 9: アーバンデザイン講演会(愛媛大学南加ホール)
2014. 5. 14: 市役所幹部へのUDCM事業説明(松山市役所)
2014. 5. 17: 第一回道後温泉活性化懇談会に出席(椿の湯)
2014. 5. 20: 第三回松山市都市再生協議会に出席(松山市役所)
2014. 5. 20: 松山市賑わい再生社会実験業務委託選考委員会に参加(松山市役所)
2014. 6. 18: 松山青年会議所理事長対談(松山青年会議所)
2014. 7. 11: 松山銀天街L字地区賑わい再生推進本部会合に参加(松山銀天街商店街組合事務所)
2014. 7. 15: 第二回道後温泉活性化懇談会に出席(椿の湯)
2014. 7. 15: 松山銀天街L字地区賑わい再生推進本部会合にて、L字地区の方向性をアドバイス(組合事務所)
2014. 7. 25: 第一回一番町大街道口景観整備専門部会に出席(松山市役所)
2014. 7. 26: 風景づくり夏の学校 課題説明会を開催(東京大学)
2014. 7. 29: 風景づくり夏の学校 現地説明会を開催(道後地区ほか)
2014. 7. 29: 東京大学復興デザイン研究体セミナーにて講演(メルパルク広島)
2014. 7. 31: 松山銀天街L字地区賑わい再生推進本部戦略会議にて、調査方向性をアドバイス(組合事務所)
2014. 8. 1: 松山商工会議所地域開発委員会にて講演(松山商工会議所)
2014. 8. 27: 第二回一番町大街道口景観整備専門部会に出席(松山市役所)
2014. 9. 2: 松山銀天街L字地区賑わい再生推進本部戦略会議にて、コンセプトについてアドバイス(組合事務所)
2014. 9. 19-20: 風景づくり夏の学校(道後地区および愛媛大学南加ホール)
2014. 10. 6: 第四回松山市都市再生協議会に出席(松山市役所)
2014. 10. 16: 第三回一番町大街道口景観整備専門部会に出席(松山市役所)
2014. 10. 22: 路面電車を主とした公共交通利便性向上検討業務委託選考委員会に出席(松山市役所)
2014. 10. 28: 松山銀天街L字地区賑わい再生推進本部戦略会議にて、配置計画についてアドバイス(組合事務所)
2014. 11. 1: まちなかひろば及びUDCM拠点施設オープン、オープニングフォーラム(UDCM、坂の上の雲ミュージアム)
2014. 11. 21, 29: アーバンデザインスクール(第1回, 第2回)(UDCM)
2014. 11. 27: 道後活性化まちづくり勉強会(道後商店街主催)にてアドバイス, アンケート調査実施(道後地区)
2014. 12. 1: UDCK・UDCY・立命館大学他によるUDCM視察(UDCM)
2014. 12. 1: 風景づくり夏の学校 かるたワークショップ(道後地区ほか)
2014. 12. 2: 松山銀天街L字地区賑わい再生推進本部戦略会議にて、海外調査報告(組合事務所)
2014. 12. 3: 第1回アーバンデザイン研究会を開催(UDCM)
2014. 12. 5: アーバンデザインスクール(第3回)(UDCM)
2014. 12. 13: 工作+DIYワークショップ(UDCM、みんなのひろば)
2014. 12. 19: アーバンデザインスクール(第4回)(UDCM)
2015. 1. 9, 17, 23: アーバンデザインスクール(第5回, 第6回, 第7回)(UDCM)
2015. 1. 15: 愛媛大学工学部若手勉強会にて研究発表(愛媛大学)
2014. 1. 22: 道後活性化まちづくり勉強会(道後商店街主催)にてアドバイス, アンケート調査結果報告(道後地区)
2015. 1. 27: 松山銀天街L字地区賑わい再生推進本部戦略会議にて、配置計画についてアドバイス(組合事務所)
2015. 1. 29: 松山駅周辺景観計画等策定基礎調査業務委託選考委員会(松山市役所)
2015. 1. 29: 松山駅周辺拠点街区に関する整備計画調査検討業務委託選考委員会(松山市役所)
2015. 1. 31: 第2回アーバンデザイン研究会を開催(東京大学)
2015. 2. 2: 公共施設マネジメントセミナーにて講演(全日空ホテル)
2015. 2. 6, 7: アーバンデザインスクール(第8回)(UDCM)
2015. 2. 7: 第四回道後温泉活性化懇談会に出席(椿の湯)
2015. 2. 9: 自転車シンポジウムin松山に参加(愛媛大学南加ホール)
2015. 2. 13: 第四回一番町大街道口景観整備専門部会(松山市役所)
2015. 2. 18: 全日本建設技術講演会にて講演(松山市役所)
2015. 2. 24: アーバンデザインスクール(第9回)(UDCM)
2014. 2. 26: 道後活性化まちづくり勉強会(道後商店街主催)にてアドバイス, 再開発事例紹介(道後地区)
2015. 3. 5: アーバンデザインスクール(第10回)(UDCM)
2015. 3. 7: 全国UDCフォーラムにて講演(UDCK柏の葉)
2015. 3. 11: 愛媛県庁21世紀研究会にて講演(愛媛県庁)
2015. 3. 20: アーバンデザインスクール(第11回)(UDCM)
2015. 3. 21-22: 道後源泉クイズ&ウォークを開催(道後地区)
2015. 3. 23: 松山アーバンデザインビジョン研究会を開催(UDCM)
2015. 3. 25: 第五回松山市都市再生協議会に出席(松山市役所)
2015. 3. 26: 第五回道後温泉活性化懇談会に出席(椿の湯), 道後活性化まちづくり勉強会(道後商店街主催)にてアドバイス(道後地区)
2015. 3. 27: 風景づくり夏の学校 成果報告+座談会 を開催(坂の上の雲ミュージアム)

発表論文等

大山雄己, 福山祥代, 羽藤英二: 活動欲求を考慮した離散-連続モデルによる小滞在発生メカニズムの分析: 日本都市計画学会: 都市計画論文集: Vol.49-3, pp375-380: 2014. 11

新階寛恭: 自転車政策の新たな可能性について~公共交通との連携に関する海外先進事例調査から~: いぎん地域経済研究センター: IRC Monthly: 2015/3, No. 321, pp12-21: 2015. 3

片岡由香, 新階寛恭, 松本啓治, 羽藤英二: 公学民協働による都市空間形成に関する研究 - 松山アーバンデザインセンターの取組みを事例として - : 日本都市計画学会中国四国支部: 都市計画研究講演集13: pp13-14: 2015. 4

9. おわりに

松本 啓治（シニアディレクター）

いま、松山市の中心部の街並みが大きく変貌しようとしている。松山駅周辺整備や花園町通り整備、一番町大街道口景観整備、二番町通り整備などの事業が進んでいる。

また、道後地区では、「椿の湯」の新湯建設や周辺景観整備、上人坂の整備などが計画されている。

このような時期を捉えて2013年に都市デザイン課が設置され、景観に配慮したアーバンデザインに取り組んでいることは、実にタイムリーであり、アーバンデザインセンターもそのような背景から昨年誕生したものと推察される。

しかしながら、私はUDCMがどのような活動をおこなうべきか明確な解答を持ち得ていなかった。その答えは先進地にあるとUDCK柏の葉などを視察した。

UDCKは様々な主体が関わっているが、東京大学と三井不動産とが軸となって土地区画整理事業が進む新都市の空間デザインに取り組んでいるといったほうが判り易い。

松山市が目指すUDCは、既存の50万都市が対象地であるという点で類例がない。都市問題が複雑に絡み合い、単純な手法では解決できない。だからこそ連携の環が必要と都市再生協議会が設立されUDCMがその実行組織となった。多くの個人・組織が連携・協働して、それぞれの得意分野をフルに発揮して課題に対処する形態をとった。

松山市との連携・協働が進むなか、11月1日UDCMが中心部の湊町3丁目にオープンし、隣接して「みんなの広場」が道路を挟んだ隣地にオープンした。

UDCMと一体となって街に変化をもたらす施設である。この広場は5ヶ月たった今日、早くも多くの子供達や若者に日常的に利用されており、「DIY」や「親子で楽しむ運動広場」など多彩なイベントの場となって大成功の感がある。

また、UDCMの1階のわずか50㎡スペースで展開されるアーバンデザインスクールは30人を超える若者が集まり熱いトークが繰り広げられている。

更にアーバンデザイン研究会や各種検討会議以外に、「演劇ワークショップ」や「柑橘ソムリエ愛媛」などのイベントや友達との待ち合わせやおしゃべりの自由な空間として親しまれてきている。

UDCM2階では、3人のスタッフが常駐し、前述の通り市の計画の補強、深化に取り組んできた。

特にUDCMの位置するエリアのまちづくり支援を行ってきたことは今後大きな意味を持つだろう。

連携の環をさらに実効性のあるかたちに深化することでUDCMの活動は市民に認知され期待されることとなるであろう。

発行
平成27年3月31日
松山アーバンデザインセンター